

48. パプアニューギニア

ラバウル話を続けます。田中義一内閣の時のシベリヤ出兵あたりから陸軍の時代錯誤、思い上がりが始まり、張作霖爆殺、満州事変、五、一五事件、美濃部博士の天皇機関説への執拗な攻撃、二、二六事件、シナ事変、ノモハン事変と一部陸軍軍人天保銭組の中樞がやりたい放題、三権分立を基本としながら統帥権のみが一人歩きしてしまった結果です。

ところが陸軍は満蒙、中国を支配することを夢見ており、それを阻害するであろうソ連の力を排除する北進論は盛んで、陸大の教育テーマは常に対ソ戦略が主流でした。従って米英と戦うことは前提とした南進論は毛頭なかったようです。ところが満蒙問題、中国問題が国際問題となり欧米先進国と対立するようになって国際連盟脱退に追い込まれ、自から世界の孤児になったばかりではなく、ABCDラインの経済封鎖、日本包囲網が敷かれ、軍部の国際的な視野の欠如が明らかになって、その対策に窮すると突如南進論が急浮上し、更にナチスドイツの快進撃に眩惑され、この機会を逃すなとばかり南進こそが国難を救う唯一の途と信じ込んでしまうのです。ABCDラインの経済封鎖で窮するのは陸軍よりも海軍で、経済封鎖の最大の目的は原油の凍結であったのですから、軍艦・航空機が可動出来なくなる燃料枯渇の恐怖は海軍の方が強かったのです。ですから巷間言われているように海軍は戦争絶対反対と主張していたのは米内大臣・山本次官・井上軍務局長のラインであって、海軍内部にも米英撃つべしの強行論が多数であったのは事実です。

そして1941年12月8日 痛恨のハワイ真珠湾攻撃に突入してしまうのです。

この突入までの過程として一寸前に戻ってみましょう。昭和15年3月参謀本部、陸軍省首脳による重大会議が開かれ、日支事変の戦線が拡大し・泥沼化し、厭戦の声は天下に広まり陸軍は対処に苦慮、その打開策を論じる会議でしたが、15年中に終戦外交を行い、もし成功しない場合は、16年初頭から戦線を縮小、自発的に撤兵を開始、18年には上海付近、豪疆の一角を残して撤兵を完了することを了解事項としています。但し外部には発表しない陸軍首脳だけの了解事項ですから、総理であった米内海軍大将には報告されておりません。この事実は戦後明らかになったことですが、その当時陸軍首脳は大部弱気になっていたことが解ります。陸軍の大英断と言えるでしょう。

ところがそう簡単にいかないのが歴史の意地悪さで、ヨーロッパ戦線が急展開し、ナチスドイツが破竹の快進撃を始め、フランスが降伏、イギリス本土への上陸作戦まもなく開始、ドイツの最終勝利を盲信した陸軍首脳は狂喜し、時きたりとばかり了解事項をさりと捨てて‘バスに乗り遅れるな’を合い言葉に「自主的逐次撤兵」の方針が「増兵徹底討伐」に替わり、「北守即ち対ソ軍備」を「南進即ち英米戦備方針」に豹変し、米内内閣を倒閣に追い込み、ワンクッションとして傀儡近衛内閣を経て陸軍の期待を一身に担った東条内閣が成立、戦争への道筋を造ったのです。この頃ソ連のスパイ‘ゾルゲ’は日本軍部は北進論から南進論に替わった自信を持って報告しておりす（ゾルゲ事件）。急遽決まった対米戦争ですから対米研究や調査など何もない精神論だけが先行状態で突入してしまい戦争遂行作戦に錯誤や誤謬が噴出してくるのも当然の結果でしょう。

あの時代を振り返って見て、ABCD ラインの経済封鎖、日米交渉のさなか絶対に呑めないようなハルノートを突き付け、アメリカ政府の強硬な態度の裏に何が潜んでいるのか、ヨーロッパ情勢を分析できアメリカの焦りを読みとれる国際感覚があったならば別の対処があったはず、さらにナチスドイツの宣伝を冷静に分析することができたならナチスの無謀さが読めたはず、スウェーデン駐在武官だった小野寺少将がナチス崩壊へのシナリオを報告（ポーランド地下組織からの情報）したのをはじめとして数多くのナチスの危険性を指摘する情報が寄せられたにもかかわらず、その情報を分析する情報機関がなかったことや情報将校の不足、情報分析を軽視した島国根性丸出しでは精神論だけが先行してしまい、軍人内閣はただ悲憤慷慨するだけ、座して死を待つより、窮鼠猫を咬むのような無謀すぎる判断で戦争へと突入してしまうのです。



①

前回の第 47 話、‘ラバウルとソロモン群島’に続いて次の作戦であった‘ニューギニア作戦’について見てみましょう。パプアニューギニア本島の珊瑚海側にあるポートモレスビーは文字通り天然の良港です。これは沖合に一直線に伸びた環礁の一部があり、これが見事な防波堤の役割をしており、内海は水深 50m 位で、うねりは全く入ってこなく大艦隊が停泊可能ですから海軍が着目し、ここをベースにして米濠遮断作戦を目論むのは作戦遂行には当然かもしれませんが、それは作戦遂行の戦力を保有していることが前提で、精神論だけが先行する我が軍の侵攻作戦は悲劇の序奏にすぎなかったのです。

第一回のポートモレスビー侵攻作戦は、南遣艦隊（空母 3 隻・第 5 航空戦隊）と陸軍の輸送船団（12 隻）がパプアニューギニア東端のサマライ岬廻りで進撃しましたが、1942 年 5 月 8 日 待ちかまえていた米海軍の機動艦隊と史上初めての航空母艦より発進した航空機による相互の激闘（珊瑚海海戦）で双方が 1 隻の空母を失い、日本軍はこの珊瑚海を抜けきれず引き返し、海路からのポートモレスビー攻略を諦め、大山脈超えての陸路による攻撃に切り替えたのですが、ここで疑問に感ずるのは海路を封鎖されているのに港だけ占領しても全く意味がないことに気が付かないのでしょうか。

海上からの侵攻は、地図を見るとアラフラ海側からの侵攻も出来そうですが、私も船に乗る前はそう考えておりましたが、実際アラフラ海に来てみると珊瑚礁の海で大型船は航行できません。またヨーク岬のトレス海峡は珊瑚礁が海路を塞いでおります。ですから東端以外は海路がないのです。

海上からの侵攻が無理と解ると、陸軍はソロモン海に面したブナをベースにしてオーエンスタンレー山脈を越えてポートモレスビー攻略を立案します。直線距離では約 220km 兵要地誌は完全な白紙状態、この作戦に参加したのは新設された 17 軍の南海支隊、歩兵第 144 連隊（高知）、歩兵第 41 連隊（福山）、山砲第 55 連隊、総数 1 万 1 千名の兵士、指揮官堀井少将。ブナからココダ迄は道らしきも

のがある程度で戦車やトラックは走行できず、やっと馬匹運送が可能という厳しさ、南海支隊前線司令部をココダに設置しましたが、ここから先は人跡未踏といえるような 4000m 級の大山岳地帯ですから重砲は運べず、兵士のみが重装備で走破させる作戦ですから、失敗は必然、それでも強行した参謀本部の秀才参謀達の能力を疑いたくなります。 体力の限界を超えた辛苦の末、大山脈を越えて山脈の出口であるイオリバイワまで連隊規模の兵士が辿り着きました。出口といっても相当の高地で夜になるとはるかにポートモレスビーの街の灯が微かに見える程度です。偵察機による情報で正確に把握していた濠陸軍(第 25 旅団)がこのイオリバイワに絶対的な防衛線を張り巡らして待ちかまえており、飢えと疲れでフラフラの我が兵士に容赦のない猛射を浴びせ約 5 千の兵士が戦死しております。この作戦には 1 万 1 千の兵士が動員され総戦病死 6500 名ですから、殆どの犠牲者はこの戦いで戦死です。

私もポートモレスビー寄港の際に年輩のタクシー運転士に「濠州軍と日本軍が闘ったイオリバイワ (Ioribaiwa) は知っていますか」と尋ねたところ、行ったことはないが知っているとの返事、但し相当の距離があるので朝早く出発しないと夜までに帰れないとのこと、それでは翌早朝出発、ポートモレスビーは首都ですから大都会ですが、郊外にでると人家も畑地もなくなり、辛うじて車が走れる道路が草原と原野のなかにある程度、行き交う車もなし、やがて登り坂になり曲がりくねりながらしばらく走ると運転士さんがこの辺だと聴いているとのこと、全くの未開の原野で毎日のスコールで土砂が流れ込み背の高い野草が生茂るだけの荒地ですから戦場であった痕跡は何もありません。運転士さんもこの辺だと聴いたことがある程度でハッキリしたことは解りません。付近には人家もなし、勿論人影も全くなし、仕方がないので小高い丘に花束と船から持参した日本酒と日本からの清水を一升瓶に入れたのを供えて合掌しまし

た。見上げればオーエンスタンレー山脈が聳え立ち、この大山脈を重装備で走破してきた兵士がどんな思いでこの原野に辿り着いたのか、そして次の瞬間待ちかまえていた濠州軍の十字砲火を浴び、無念の涙を滲ませてこの原野の下に眠っていると思うとこの様な無謀な作戦を立案し命令した参謀本部に対し憎しみが沸き上がるばかりです。



②

一方、港湾が一望できる高台に登り、海軍がここに一大ベースを造ろうとしたことは良く理解できる、それくらい天然の良港と言える理想的な港湾です。しかし補給をどうしようとしていたのか、スムーズに補給が出来る訳がないのは明らかなのに軍令部はどう判断していたのか、思考能力がどうなっていたのか、おおいに疑問だらけです。

これは既にソロモン群島近海での米軍による輸送路の徹底的な破断作戦、ニューギニアにはダンピール海峡の悲劇のような輸送船団の壊滅と例がいくらでもあるにも拘わらず作戦遂行だけを命令した

参謀本部（陸軍）や軍令部（海軍）はどうなっていたのか。また陸軍と海軍が果たしてどの程度の連絡をしていたのか、どうも相互連絡は全くできていなかったのではないかと、疑問は果てしなく広がります。

我が海軍と米海軍の思考に付いて述べますと、我が海軍軍人の気質はより強力な敵艦との1騎打ちに闘志を燃やし、輸送船のような敵艦を攻撃することを潔しとしない、つまり‘町人斬り’とか‘ナマス斬り’と称し、魚雷がもったいないとかいって避ける傾向がありました。反対に米海軍は徹底的に通商破壊専門で、輸送船団をねらい撃ちにしております。これはナチスのUボートも通商破壊を主目的として活躍しておりましたから、日本人特有のサムライ意識が潜在していたのでしょうか。継戦能力を阻害する点では通商破壊の方が大きく影響しますから作戦としては当然通商線破壊を積極的にやるべきですが、我が軍は米軍に散々攻撃され壊滅しているにもかかわらず敵の補給路を断とうとするような作戦は発想ありません。戦後米海軍や調査団がやって来て日本海軍には大型の潜水艦を保有しながら、米軍の補給路が長大になっていたのにも拘わらず通商破壊作戦を全くやろうとしなかったのはどうゆうことだと、疑問を呈し調査しております。

その結果潜水艦の用兵思考の欠如と手厳しい判断をしております。どうも日露戦争における日本海戦の艦隊決戦こそが海軍軍人の精華と思いきみが激しすぎたようです。ですから巨艦巨砲による砲撃戦こそが海軍軍人の本懐とし、通商破壊など不名誉な行為としていたのです。その例がレイテ沖海戦に於ける栗田艦隊が米軍の大輸送船団（約500隻）を眼の前にしていながら謎の反転をしてしまった事に秘められているのでしょう。

この航海で各地の激戦地を訪れ、私としては年来の思いがけない、海岸で美しい貝殻や小石を多数拾い集め、これを激戦地別に袋に入れて海軍兵学校の卒業生の集会に寄贈しましたが、その後卒業生で戦死された方々の御遺族宅へ贈ったとの報告を頂きました。

‘ABCD ラインの経済封鎖’解説

ABCD ラインの経済封鎖包囲陣：A（America）、B（Britain）、C（China）、D（Dutch）アメリカ、イギリス、中国、オランダの頭文字を連ねたもので我が国を対象とした経済封鎖を断行した国々です。

- ◎ アメリカ（America）：日米通商航海条約の破棄、その結果、戦争には絶対必要な軍需物質である石油と屑鉄が輸入できなくなった。当時我が国の石油の全輸入量の約80%はアメリカ、カルフォルニア州で生産する原油に頼っていた。屑鉄は約90%以上を輸入していた。
- ◎ イギリス（Britain）：対日資産の凍結、日英通商航海条約の破棄、中東、インド、ビルマ、マレーシャ、シンガポールはイギリスの植民地であり、錫、銅その他南方鉱物資源の輸入が凍結してしまった。
- ◎ 中華民国（China）：日支事変で戦争状態ですから通商はありません。何故日支事変で日支戦争と叫ぶのは「宣戦布告」をしてないで戦争とは言えないのです。
- ◎ オランダ（Dutch）：対日資産凍結、日蘭会商打ち切り通告、現在のインドネシアは全土オランダの植民地だったのです。従ってジャワ本島やボルネオの油田地帯はオランダの石油会社が所有し、

生産していたのです。ところがオランダ本国はナチスに占領されたため、亡命政府はロンドンにあり、オランダ王室もロンドンに避難しておりました。我が国は亡命政府と交渉したのですが、アメリカの圧力によって交渉打ち切りとなって、我が国は孤立無援、世界の孤児になったわけです。

石油の備蓄量は平時で3年弱、戦時で1年半、山本五十六元帥が半年か1年は暴れてみせると言ったのはこの備蓄量を念頭に置いての言葉だと思います。

47話で述べましたが、この経済封鎖を打開しようとしての交渉が、ワシントンにおける日米会談で（全権野村吉三郎大使、補佐来栖三郎大使 対 ハル国務長官）、我が国の外交電報は全て解読され手の内は全て読まれての交渉ですから完敗、交渉最中に奇襲攻撃をやってしまいました。

写真・絵

- ① パプアニューギニアの東側の半島を廻ってポートモレスビーを襲撃する予定が途中のサマライ沖で日米機動艦隊が遭遇、史上初めての航空母艦機の戦闘になり、上陸作戦は中止、陸路オーエンスタンレー山脈越えの作戦に切り替わり悲劇の始まりです。
- ② 4千m級の山々が聳えるスタンレー山脈を重装備徒歩で走破してきた兵士を待っていたのは豪州軍の十字砲火でした。合掌。